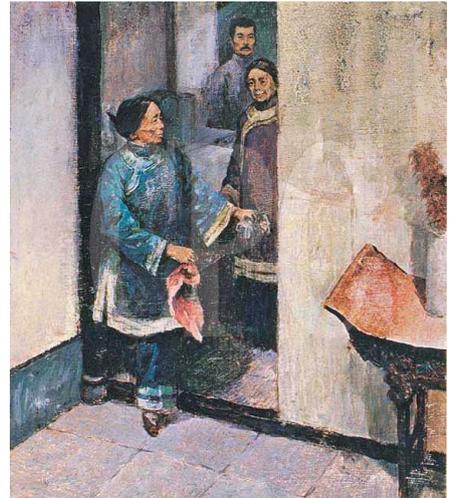


# 故郷第四場面 読んだ読んだ

三年三組

氏名

今、母の口から彼の名が出たので、この子どもたちの思い出が、電光のように一挙によみがえり、わたしはやつと美しい故郷を見た思いがした。そのあと、近所にいる親戚が何人も訪ねてきた。その対応に追われながら、暇をみて荷ごしらえをした。そんなことで四、五日つづれた。



主人公はレントウの今の様子について母に尋ねたが、母はレントウの暮らしも楽ではないことを知っており、それをあまり言いたくないため、外を少し見てくると理由をつけて逃げた。また、ヤンおばさんは、昔は豆腐屋小町と呼ばれるほど、男女問わず人気があり、人柄がよく、店を商売繁盛させていた。しかし、今では嫌みを言ったり、堂々と物を盗んだりして、とても性格が悪くなってしまった。それは、ヤンおばさんもお金がなくなり、生活が苦しくなってしまったからで、生活苦がヤンおばさんの人柄を変えてしまったのだ。

さん

主人公は、記憶にないヤンおばさんに出会った。昔は美人で豆腐屋で働いていた人だ。商売繁盛していた昔は性格がよかった。しかし、生活苦がヤンおばさんを変えてしまった。あんなに心優しくかったヤンおばさんが、あざけ笑ったり、人の物を平気で盗んだりするようになったのだ。主人公は、母との会話で思い出したレントウがヤンおばさんのように性格が変わっていないか、神秘の宝庫のままかどうか、とても心配している。

くん

主人公は驚いた。それは、ヤンおばさんを見たからだ。ヤンおばさんは、昔、美人だった。しかし、今は昔のように白粉も塗っていないし、人柄もがらつと変わってしまった。そんなヤンおばさんを見て、主人公は思った。『生活苦が人を変えてしまったんだ。』と。ふと主人公はレントウもこんな感じになっているのではないかと、レントウもほお骨が出て、昔のような丸顔でつやのいい顔をしていないのではないかと主人公は思った。また、ヤンおばさんのようにレントウが性格が変わってしまったのではないかと心配になった。

さん

主人公は、ほお骨の出た、唇の薄い、五十がらみの女を見て、脚の細いコンパスそっくりだと思ひ、豆腐屋のヤンおばさんだとは気付かなかった。昔は白粉を塗っていたし、ほお骨も出ていなかったし、ずっと座っていて、良い人柄のヤンおばさんだったが、姿も性格も変わってしまった。その背景は、お金がなくなり、生活が苦しくなったことだ。生活苦が悪い性格へとヤンおばさんを変えた。そんな変わってしまったヤンおばさんを見て、レントウは昔と変わってしまったのかと、主人公は気になり始める。

さん

主人公はレントウの現在を聞こうとした。しかし、母は言葉を詰まらせ、戸外へと出て行ってしまった。その姿は、以前の主人公と同じ逃げ腰の姿だった。久しぶりに会ったヤンおばさんだったが、様子が違う。白粉を塗らず、ほお骨が出て、唇も薄くなっている、過去は座っていて見えなかった脚は、コンパスのように細い。しかも、以前の人柄の良さはどこへ行ったのか、嫌みを言い、母の手袋も盗んでいった。生活苦がヤンおばさんの人柄を変えてしまった。そして、主人公は、そんなヤンおばさんを見て、レントウも同じようになっていないか心配になった。

くん